

NPO法人

全日本語りネットワークの ニュース

2024. 1. 28 発行

〒185-0021 東京都国分寺市南町 2-18-3 国分寺マンション B-03A

(Fax) 0237-67-7001 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

神々は海の彼方からも

三田村慶春 (NPO 法人全日本語りネットワーク理事)



辰（龍）年の新年、明けましておめでとうございます。

私が小学3年生の頃でしたか、当時、北九州に暮らしていた私たち3人の兄弟には、父に連れられて、長崎市のペーロン競漕を観に行った日の思い出があります。ペーロンとは中国語の白龍（パイロン）から転化した名称で、17世紀、主に南中国での豊漁祈願の祭祀儀礼が龍舟競漕として日本に伝えられ、以来、絶やすことなく続けられている伝統行事です。

長崎の街では長崎港を舞台に、市内各地域から参戦した細長い舟での競漕が繰り広げられます。漕ぎ手は30人ほど、太鼓や鐘、銅鑼の賑やかな囃子のリズムに合わせて、5～6艇が順位を競うのです。岸壁を埋め尽くす応援団や観客たちは、大漁旗や応援旗を打ち振り、声を限りに漕ぎ手たちに声援を送ります。中には龍の頭を模した舟も出漕していたように記憶しています。

さて先日、2週に1度、昔話を語りを訪れている保育園で、子どもたちに「十二支のはじまり」を語ったおり、こんな質問を受け、考えさせられました。

「十二支の中に、海の動物は竜宮城の龍だけなのは、なぜですか？」と。

確かに我が国は四方を海に囲まれ、時に「海洋国家」とさえ声を大にして称されることがあります。しかし、語り手の一人として、海にまつわる物語をどれほど語る機会があったかと思えば、伝承の昔話の数多ある中で十指にも足りないほどです。

古事記には、イザナキ、イザナミがオノコロジマを生み出す話、因幡の白兔と大国主命の物語、山幸彦と海神の娘・豊玉姫の愛情物語が記されています。また浦島太郎の竜宮城との往還の話は誰にも親しまれている物語です。昔話に眼を遣るにしても、魚女房、塩吹き白、猿の生き胆、佐渡を始めとして各地に伝わる八百比丘尼の伝説などが挙げられるのみです。

タイには、日本の蛇婿の話の原形を思わせる異類婚姻譚が伝わっています。人魚に嫁いだはずの人間の娘が、実は恐ろしい龍神である夫の姿を見たために、実家に逃げ帰ってしまわざるを得ず、大晦日の日にだけ夫の姿に会えるという物語です。

約3万年ほど前、北からも南からも、この国の島に渡ってきた人々は、荒ぶる海を越えるため、素朴で不安定な木の舟を操り、または点々とつながる島伝いに到来したはずで。

しかし、やっと辿りついた島は、急峻な山々、時に氾濫する河川、限られた耕作地、その他、人々の暮らしを悩ませる自然現象や生き物たちとの日々の闘いがあり、そのことが数々の昔話を生み出し、伝えられてきたことは言うまでもありません。一方、1万4千を超える、この国の島々にも、日々の漁や海産物の採取の生業をとおして自然との緊張があり、それを克服するための知恵が編み出されてきたことでしょう、その中で、まだ私たちが出会っていない海の物語が隠されているのではないかとも思うのです。

2002年、島根県境港市で開催された「第6回 全日本語りの祭り」では、当市の美保神社も会場の一つでした。その美保神社にても、伝統の青柴垣（あおふしがき）神事、諸手船（もろたふね）神事には、伝統行事としての競漕が行われ続けています。

古来、海の彼方から訪れる神々は、物語をも携えてきていたのではないのでしょうか。